

盲幼児の教育



武田耕一郎

「盲児は這わずして立つ」といわれている。目の見えない乳幼児は、昼寝からめざめたときでも、すぐそばにあるミルクのびんや玩具なども見えないので、普通児のように、それらを自分でとろうとして這い出す動機を持たない。

したがってあらゆる不満はただ泣いて母親に訴えるだけであろう。このようなことから、盲児はあまり這う時期がなくて立つ結果になると思われるが、これは、生来の全盲児(全く視力のないもの)を育てた母親たちのひとしく認める事実である。

このことから考えると、盲幼児の教育は、すでにこの時期から普通児のそれとは違ったものが考えられると思うのであるが、私はただここでは、盲学校の小学部で預かる盲児の現状からみて、「入学以前に、このようなことに注意して育ててほしい」という点を二、三あげて、標題の責を果したいと思う。

それは先ず、できるだけ盲児の生活空間を拡くするような生活をさせてほしいということである。

盲児は一般に、活発に行動しないばかりかその行動範囲もきわめて狭いようである。その中のあるものは家庭においてさえ、たんすと机の間とか、戸棚のわき、机の下などに自分のおもちゃを持ちものをもち込み、狭い一室だけで生活しているものや、あるいは、必要なものは一切他の人にとってもらって、きわめて緩慢な動作しかないものさえある。

このような盲幼児の行動範囲を拡大するためには、子どもの興味と関心の生成に注意しながら、除々に辛抱よく指導するのである。ただ注意しなければならぬことは、家屋内といっても見えない子にとっては、危険な場所があるわけで、そのようなところには安全な設備をしておくとか、またどうしても危険だと思われるところ

は積極的に教えていくことである。

さて、はじめに寝起きしている一室を自由に行動でき、その室を空間的に理解させるよう指導することも一策であろう。たとえば、おもちゃやおやつの置き場所をきめておいて、必要なときにはひとりですべてこれるようにし、必要なくなったときには、もとの場所に戻すようにしつける。また、できるだけ用事をいいつけて部屋一ぱいに行動させるがよい。そのような周囲のものの心づかいが子どもの心身の発達とともに実を結び、子どもは目は見えずともその部屋の構造なり、いろいろのものの配置を理解し、やがてはその部屋全体を理解し、自由に行動できるようになるであろう。

そのようになったときの子どもの自信が他の部屋や家屋の構造に對する関心にもなり、除々に、その生活空間が拡大される結果になるわけである。

なお、盲幼児を「危いから危いから」でただ庇護するだけでなく、よき指導によって積極的に子ども達の生活を拡大していくのである。夕方、近所の子どもたちの遊んでいる広場へつれていくとか、近所にお友だちをつくってやるとか、買物につれていくとかすること、盲幼児は、「文字さんのお家」「あれは、やおやおばさんの声」「あの犬は大工さんの家の犬」とかいうように生活環境がいくぶんでも広がっていくであらう。

つきには、触觉の訓練をしてほしいということである。手は盲児の触角である。先ずふれてみて、そのものの何であるか

を知るのである。学校に入学して、いろいろな学習をするためには、ふれてみる意欲と、鋭敏な触觉が必要である。入学と同時に木の葉や花にもふれてみるし、盲児の文字である点字もよまねばならない。このように指頭の触觉をたよりに学習をはじめ、だんだん複雑な図形も理解するし、小さな昆虫の観察もできるようになるのである。また、手と腕を大きく動かしながら実物の機関車のようなものも観察するのである。

盲児の触觉が盲児の将来にとってどれほど大切なものであるか考えないで育てると、盲児の知能の発達にも大きな開きをみせるであろう。盲児はとかくおとなの話の中で日を暮らし、耳と口だけで生活するようになりやすい。このような盲児は、子どもらしい知能の発達もおくれ、手足、体もあまり動かないので体の発育もおくれる結果となるのである。

しかしながら、盲児の家庭では、毎日の食事にしても、なるべく盲児のたべやすいように調理し、魚の骨などは全部とり去ってあたえているのが普通ではなからうか。私はこれを一切やめなさいというのではない。このような親心がなければ盲児を育てられないことは知っているけれども、ただ、自分の口へほうり込まれるものをたべ、それが何であるかも教えられない方がかわいそうだと思うのである。触觉訓練の機会はここにもある。

夕方、晩のお使いに子どもも市場へつれていき、大根、人参、ねぎなど、あるいは肉、卵、その他いろいろな魚を買ってきて、それ

らを調理する前に、その一つひとつを子どもに観察させるのである。そして、それらについて子どもと話し相手になってやったら、食事も楽しくなるであろうし、子どもたちの生活がどれほど張りのあるものになるかわからないと思う。しかし盲児は忙しいときの足手まといになるので、買物には、盲児を部屋の中に残し、母親ひとりですっきりと時間的能率をあげるのではなからうか。

その他、玩具をはじめ家庭内のいろいろな器具など子どもの手にふれるあらゆるものについて、説明しながらよく観察させるがよい。幼小の頃からよく訓練された盲児の触覚は、われわれの想像以上の微細な観察もできるし、また、その観察の正確さに驚くこともしばしばである。

「ある女の子が、いろいろな布地の切れ端を集めていたが、その一枚一枚について、「これはわたしの夏服」「これはおかあさんのスカート」「これはおねえさんの上衣」と三十数枚の布地を区別した。普通児なら色や模様で区別するところであろうが、盲児は触覚だけである。

また、ある子は、これは硝子でできているとか、瀬戸物だとか、金属製、木製、セルロイド、エポナイト、合成樹脂その他なんでも見分けることができた。

その他、物の形、寸法などかなり正しく判断する子もいる。

これらの子どもたちは、みな周囲のものにふれて、未知の世界を自分の触覚によって確かめようとする。「手をうごかして物を見る」

ことを指導することは、盲児の目を開いてやることであり、盲児の知識慾を満足させてやることにもなる。

観察の指導には、指導の段階が考えられる。触覚で比較的判断し易いものから、むずかしいものへと発展させるのもその一つである。たとえば両手の中に一度に入るものからだんだん大きいものへ、あるいは反対にだんだん形の小さいものへ……小さいボタン、ねじ、かぎ、ペン先、針、ビーズ玉など……それから形の単純なものから複雑なものへ、また、強くふれると形のくずれるものへ……紙フーセン、ケーキ、豆腐、ウドンなど……更に学習が進むにつれて、小さな花、生きて動いている魚や昆虫などへと発展するのである。

また、一面、盲児の心身の成長を考慮しつつ決して無理のないようにすべきはいうまでもない。

さて、今まで触覚についてのみ述べてきたが、盲児が目がない代りに動員する感覚は、視覚だけではない。残された他のすべての感覚を総動員して外界に接しているのである。聴覚、味覚、臭覚などを適切に利用して、正しい観察をするよう指導すべきはいうまでもない。

いずれ、盲幼児には、家庭においても小さいときからよく物を観察する機会をあたえ、また、その仕方を教えて、何にでもふれてみる習慣をつけておきたいものである。そして四、五才頃は、このような習慣をつける最もよい時期でもある。

つきには、日常の基礎的な生活訓練をしつかりしておいてほしいことである。

盲児の中には、家庭での躰がよくできていないばかりか、日常のささいな生活行動のできない子どもをよくみかけるのであるが、これは見えないからといって、いつまでもこども扱いにし、なんでも人手でやってやり、ひとりでもできることもやらせてみないためであり、目が不自由だから、かわいそうだからで、子どものわがままをそのまま通させておくまがった愛情の結果であろうと思う。私は、新入生の父兄の中に、子どもがただ口さえあければ事たるような食事の補助をしている母親をみることもある。盲児も根気よく教えることによってじゃうずに食事もできるし、お手洗いにもいけるのである。ひとりでもやってみないうちは、いつまでたっても何もできないのだ。

盲児の躰は盲児を普通児なみに扱うことにはじまる。しかし、目の見える子は、いわゆる見様見真似で、一通りなんでも覚えていくであろうが、盲児の場合は自分でずわることも、また、お客様に両手について挨拶することも手をとって教えられないうちにはできないわけである。

学校へあがるまでには、自分ひとりで洋服をぬいだり着たりすること、歯をみがき、うがいをしたり、髪をけずったりする朝の身だしなみをする、お汁をこぼさず食事すること、お手洗いにひとりで行くことなどは、指導によってはじゅうぶんでできるはずである。

夜やすむとき、洋服をぬいで枕もとにおくことからはじめ、上衣をうら返しに着ないように袖に手を通すこと、ボタンをかけること、バンドをしめることなどと、徐々に、ひとりでもやらせてみるのである。

朝の用便などは、習慣になるよう朝起きたらすぐお手洗いにいくようにしむける。紙の使い方などは、長い日数をかけてもよい。衣類をよごすというので、すぐ母親が手を出したのでは、いつまでたっても上達しないであろう。衣類は当分洗濯してもと覚悟をきめ、教える育てる気持をもたねばなるまい。

箸の使い方などの指導もなかなかむずかしいようである。いずれ子ども自身にやらせてみるのである。

さてこの他、目の見える子と同じような丈夫な体をもった子に育ててほしい。いいかえれば見かけだけでなく機能をもった体にしてほしいとか、わがままでひとりぼっちの子でなく、もっと社会化された子に育ててほしいなど注文はいくらでもあるけれども、今回は紙数の関係でこれまでとする。

結局、わが子かわいさから見境いもない他からの庇護や子どもへの援助について反省し、盲幼児の将来を考え、強くたくましく育てたいものである。

盲幼児への援助は、必要な程度してやるのが肝要である。またなんといっても、根気よく教える育てる気持が大切であろう。

(東京教育大学付属盲学校)